

終末期の夫を持つ妻の心理的プロセス

— 予期的悲嘆、悲嘆の分析

5階西病棟

○ 秋森 久美 中村 香江

キーワード：予期的悲嘆、悲嘆、終末期患者の家族が持つニーズ

I. はじめに

患者が終末期にあることを知った家族は予期的悲嘆という心理的プロセスを辿り、死別後は悲嘆のプロセスへと移行する。予期的悲嘆のプロセスにある家族への援助は現在の悲嘆の苦痛の緩和のみならず、死別後の悲嘆のプロセスを順調に経過させるためにも重要であるといえる。

今回膵臓癌末期の夫を介護する妻に人工肛門ケアを通して入院当初から関わりを持つことができた。この妻の予期的悲嘆、悲嘆の心理的プロセスの分析を行ったので報告する。

II. 研究目的

予期的悲嘆、悲嘆の心理的プロセスの分析を行い、今後の終末期家族看護の手がかりとする。

III. 研究方法

1. 研究期間

平成15年8月～平成16年9月

2. データ収集・分析方法

対象者の了承を得た上で、半構成的インタビューガイドを使用した面接を行い、了承を得た上でカセットテープに録音をし、録音内容を逐語録としたものをデータとした。インタビューは夫が入院中に3回、死別後に1回行った。得られたデータは質的に分析をした。

IV. 結果及び考察

入院当初より主治医からターミナルであることを説明され、病状悪化に伴い適宜説明はされていたが、夫が死亡した際は「急だったから何をどうしたらいいかわからない」という言葉が聞かれ衣服なども何も準備ができていなかった。

1. 家族が持つニーズの中で「患者の役に立ちたい」というニーズが顕著であり、ストーマケアはそのニーズを充足させていた。
2. 家族の側にいたいというニーズと夫婦間の対話を持ちたいというニーズは、家族が決めた非告知という状況においては、充足されず、予期的悲嘆のプロセスを経過する上で障害となっていた。
3. 予期的悲嘆のプロセスは適応の段階に一旦は達していたが最終的には防御的退行の段階で終了した。
4. 悲嘆の心理的プロセスは予想に反し、順調に経過し比較的早期に適応の段階に達していた。その要因として、①妻のニーズの充足、②病名非告知に関しポジティブに認知、③積極的なチャレンジタイプに該当したコーピングパターン、④団結の強い家族システム、⑤良好なソーシャルサポートシステムが考えられた。

〔平成19年4月22日 高知緩和ケア研究会 第7回研究発表会（高知市）にて発表〕